

## 「後衛思想」の先駆者

——謝冰心、巴金の心友であった中島健蔵への考察——

虞 萍

### はじめに

『冰心全集』第6巻（謝冰心著、卓如編、海峡文芸出版社、1994年）の表紙には4枚の写真が掲載されている。うち、4枚目の写真は、1963年11月、中国作家代表団が日本を訪問した際に、中島健蔵（1903-1979）<sup>(1)</sup>夫妻と撮ったものである。中島は中央に立って満足げな表情を浮かべ、左右に立つ巴金・謝冰心は中島と腕をしっかりと組んでいる。中島の妻である京子夫人は謝冰心の右側に寄り添うように立っている。左手を謝氏の右腕に添えている。写真からは中島健蔵夫妻と謝冰心、巴金との親密さがうかがえる。

中島健蔵はフランス文学者であり、1956年3月23日に設立された日本中国文化交流協会の初代理事長を務めた人物である。フランス文学者であ

---

(1) 中島健蔵（1903年〈明治36年〉2月21日-1979年〈昭和54年〉6月11日）。フランス文学者、文芸評論家、日中友好のために尽力した社会活動家。ペンネームは水島茂村。ポール・ヴァレリーやシャルル・ピエール・ボードレールなどを翻訳紹介する一方、当時まだ無名だった宮沢賢治の作品に光を当て、戦後は反戦平和運動に貢献すると共に、日本文芸家協会の再建や著作権保護、日本と中国の文化交流に尽力した。中国切手の世界的なコレクターとしても有名である。1928年、東京帝国大学文学部を卒業し、研究室に助手として残る。1929-1934年、同校助教。1934年、東京帝国大学仏文科の非常勤講師となる。1933年、雑誌『作品』、『文学界』を創刊した。1935年、福島市出身の大原京子（日本女子大学英文科卒）と結婚。1936年、法政大学仏文科、帝国美術学校などでも教鞭を執る。1941年、法政大学仏文科非常勤講師を辞任。1945年、日本文芸協会を再建し、理事となる。1948年、国立国語研究所創立委員となる。1949年12月20日、日本著作権協議会創立、専門委員会総会議長、代表理事、事務局長となる。1953年から講談社の委嘱により野間文芸賞選考委員となる。1954年、菊池寛賞を受賞。1955年1月、新日本文学会幹事会議長に選ばれる。1955年8月、新日本文学会中央委員会議長に選出される。1956年3月23日、日本中国文化交流協会初代の理事長になる。1977年、『回想の文学』（1-5）野間文芸賞を受賞。1979年6月11日、肺癌のため亡くなった。

る中島がなぜ中国と関わりを持ち、日本中国文化交流協会の理事長まで務めることになったのか。さらに、上述の写真が撮影されたのは日中国交回復以前の1963年11月である。にもかかわらず、中島夫妻はなぜ謝冰心、巴金のような中国の代表的な知識人と親密な関係を結ぶに至ったのか。

これらの一連の謎を解くため、小論では、まず中島のシンガポール体験を踏まえ、彼が日本中国文化交流協会の初代理事長を引き受けた経緯を探ることで、中島が日中文化交流事業にいかに関わったかを整理する。次に、中島健蔵の中国訪問および日中関係に関する執筆状況を整理し、分析する。最後に、謝冰心と巴金が発表した中島健蔵についての作品を通して、日中国交回復以前の日中の知識人の交流状況を明らかにする。さらに、中島健蔵と謝冰心、巴金との交流が日中文化交流史において果たした意義を検討したい。

## I 中島健蔵と日中文化交流事業

### 1. 中島健蔵のシンガポール体験

1941年12月8日、太平洋戦争が勃発すると、日本軍は徴用を開始した。徴用とは、「国家の義務への強制的勤務」であったが、軍の徴用に拒否する余地はなく、「健康上の資格者」や、「枢要欠くべからざる職務についている者」以外は、逃れようがなかった<sup>(2)</sup>。当時39歳だった中島健蔵は、評論家やフリーランスのジャーナリストとして、原稿執筆やラジオ放送の仕事をこなす傍ら、東京帝国大学<sup>(3)</sup>の非常勤講師としてフランス文学・フランス語学の講義を続けていた。中島は自身の執筆活動が軍部の覚えがめでたくないことを承知していたが、官立大学の教職員という身分をたてにすれば、徴用されずに済むかもしれないという程度に考えていた<sup>(4)</sup>。しかし、

---

(2) 中島健蔵「苦悩のはじまり——シンガポールの経験」『後衛の思想——フランス文学者と中国』朝日選書22、朝日新聞社、1974年、p. 11。

(3) 「東京大学」は、1877年4月12日に、東京開成学校と東京医学校の合併によって設立された。1886年3月、帝国大学令により「帝国大学」と改称され、1897年6月、京都帝国大学の設置に伴い「東京帝国大学」と改称された。1947年9月、「東京大学」に改称されるようになった。小論は中島健蔵が勤めている大学名を時期に合わせてそれぞれ「東京帝国大学」、「東京大学」と称している。

(4) 「苦悩のはじまり——シンガポールの経験」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、

結局、中島は大阪城趾にあった師団司令部に集結することを命じられた。中島はすぐさま東京帝国大学へ行き、文学部長代理をしていた英文科の教授に掛け合ったが、徒労に終わった。中島は当時のことをこのように振り返っている。「今でもわたくしは、その教授のへんに卑屈な、しかもわたくしを見くだすような顔つきを忘れることができない。彼は、徴用令書が非常大権という背景をもっていることをはっきりと認識していたかどうか、もっと漠然と、軍の威力におびえているらしかった。まさか『名誉なこと……』とはいわず、『気の毒だが、まあ、仕方があるまい』と非常勤講師のわたくしを突き放した。」<sup>(5)</sup>

かくして、1942年1月14日、中島は陸軍に徴用され、マレー派遣軍に配属された。大阪の小さなホテルで軟禁同様の状態で待機し、2月（シンガポール陥落の直後）に宇品港から古びた輸送船に乗せられて、シンガポールへ向かった<sup>(6)</sup>。彼は外部の報道班員ではなく、軍司令部内の「宣伝班」という名目上は正規部隊の構成要員として配属された。この不適切な配属について、中島は後年このように批判している。「ナチスの宣伝中隊のまねであったが、わざわざそういう任務に適さない人間を選んで集めたのではないかと思われるほど、いいかげんな人選で構成されていた。」<sup>(7)</sup> 宣伝班に配属されたとは言え、特別な任務も与えられなかった中島は、シンガポールに早く慣れるために、あてもなく市中を歩きまわった。その時に、幾度となく、華僑の女性に呼びとめられて、若い男の写真を突きつけられた。その写真の台紙には「これは私の子供ですが、戦争以来行方がわからない。この青年をあなたは知らないか。どこにいるか知らないか。」と読める漢字の短文が書いてあった。これがきっかけで、シンガポールに着いたばかりの中島は、占領直後、日本軍によって行われた恥ずべき大虐殺を知ってしまったのである<sup>(8)</sup>。このまぎれもない事実は中島に極めて大きな衝撃を与えた。

---

p. 12を参照した。

(5) 同上、p. 13。

(6) 同上、p. 14。

(7) 同上、p. 15。

(8) 同上。この体験については、中島健蔵の著書『昭和時代』（岩波新書、1953年）の「華僑の母——シンガポールの悲劇」という章に詳しく描写されている。

1942年の末頃、中島の徴用は解除されて日本へ帰国し、翌1943年には東京帝国大学仏文学非常勤講師に復帰した。わずか10カ月の徴用経験ではあったが、中島は配属されたシンガポールで日本軍が華人を大虐殺した事実を知り、我が子を探して町中を歩き回る母親の哀れな姿を自分の目で見た。彼の後半生はこの10カ月の体験で一変することになる。

シンガポールでの体験に加えて、1945年5月26日、空襲により淀橋十二社の自宅が全焼し、家財の一切を失ってしまった。芸術関係の資料はこの時にほとんど全てが焼失したが、以前から興味を感じて収集していた中国関係の資料は、別の場所においてあったため、無事だった。これも中島が後半生にわたって、中国との文化交流に奮闘することになった因縁の一つであろう。

## 2. 日本中国文化交流協会の理事長を引き受けた経緯

中島健蔵は、日本中国文化交流協会設立前、日中関係について、「ずっと呼びかけられて応ずる形であった」、と振り返る<sup>(9)</sup>。憲法擁護国民連合訪中代表団員の一部と、日中友好協会の幹部などは、1955年10月15日以来、四回の会合を開いて、文化交流の新しい連絡機構について模索しており<sup>(10)</sup>、最終的に、文化交流の性質上、一党一派に偏することを極力避け、可能な限り広い範囲の人びとの参加を求めることに決まった<sup>(11)</sup>。そして、世話人を第46代内閣総理大臣であった片山哲と中島健蔵の二人が務めることが決定され、訪中代表団の弁護士大野幸一が、片山哲の代理として、中島にこれらのことを説明した。これについて、中島は「全くの不意打ちである」<sup>(12)</sup>、という言葉で当時の心境を述べている。

1955年11月15日、中華人民共和国周恩来国務院総理と日本憲法擁護国民連合中国訪問代表団（団長 片山哲）との会談において、両国の人民の友好と親善を促進するためには、文化交流を促進する必要があることに意見の一致を見、その具体的な問題については、日本憲法擁護国民連合と中

---

(9) 「日中文化交流協会——理事長役を引き受ける」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 85。

(10) 同上、p. 83。

(11) 同上、p. 84。

(12) 同上。

国人民対外文化協会との間で話し合いを行うよう提言した<sup>(13)</sup>。

戦後の日本政府は中国を敵視していた。中島は日本政府をこのように辛辣に批判している。「吉田内閣は中華人民共和国を含まない平和条約（引用者注：『日台条約』を指す）、『日米安保条約』、『日華平和条約』<sup>(14)</sup>を締結したのは日中国交を妨げた第一の禍根である。また、吉田書簡<sup>(15)</sup>は、日中国交正常化を困難にする条件を強化した。さらに自衛隊設置を促進して、日本再軍備への道を切り開いたことも日中国交正常化の妨げに導いたのであった。（中略）つづく鳩山内閣、石橋内閣は、日中国交問題の処理に関して、意欲を示しながらも短命に終り、悪条件の始末については無策であった。（中略）次の岸内閣はもとより、池田内閣を挟んで、佐藤内閣が歴然たる中国敵視政策をとるにいたった。」<sup>(16)</sup>戦後、日本政府が中国を敵視していたため、日本中国文化交流協会の設立にあたって政府からの援助はなかった。さらに、日本中国文化交流協会設立当初から、理事長などの協会幹部は無党派が条件とされたため、中島は選挙に立候補することもできなかった。

当時、中島は精神的に追い詰められていただけでなく、経済的にも困窮していた。日本中国文化交流協会設立の第一回世話人会は、1956年1月

---

(13) 「文化と政治——つらぬく無党無派」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 79-80。日本憲法擁護国民連合と中国対外文化協会は話し合いを行った結果、次の通りの申し合わせに達した。

- 一 目的（日中文化交流：引用者注）を果たすために、日本憲法擁護国民連合は、日中友好協会、その他の民主団体、文化団体等と協力し、共同して連絡機構をつくり、この機構が成立した暁には、中国人民対外文化協会と密接な連携をとって、日中両国人民間の文化交流を促進する。
- 二 上記の連絡機構と中国対外文化協会は、相手国の絵画、彫刻、建築、映画、演劇、音楽、文学その他の文化財を紹介する展覧会、公演、出版等を行うことを斡旋し、文化交流の活動を行う（1955年11月27日）。

(14) 「日華平和条約」とは、1952年に締結された日本と「中華民国」台湾との間の講和条約で、前年に締結されたサンフランシスコ条約を補完するもの。日本と「中華民国」との戦争状態の終結を定めた。条約締結に当たって国府（台湾）は日本に対する賠償請求を自発的に放棄した。

(15) 「吉田書簡」とは、日本が「中華民国」台湾政府を正統の政権として認めた吉田茂首相の二つの書簡。1951年、来日したアメリカのダレス特使に中国共産党政権を認めないことを明言したものと、1964年に訪台して蒋介石と会談した際、中国向けプラント輸出に当面日本輸出入銀行の融資を行わないことを確約したものがあり、ここでは後者を指す。

(16) 中島健蔵「日中講和への前提をなすもの」『世界』1971年10月号。底本は張鏡、村田雄一郎編『蜜月と軋み——1972-』岩波書店、2016年7月、p. 3、p. 4、p. 9を参照した。

31日正午、新橋駅楼上の「日本食堂」で開かれた。列車食堂でおなじみだった「日本食堂」は、きわめて庶民的で、物々しさが全くなかった。当時、片山哲と中島健蔵の名で招請された顔ぶれは以下の通りである。

画家・梅原竜三郎（欠席・世話人承諾）、宗教家・大谷瑩潤、元大蔵大臣・小笠原三九郎（欠席）、学術会議会長・茅城司、日本演劇協会会長・久保田万太郎、中国文学者・倉石武四郎、文学者・小宮豊隆（欠席）、元厚生大臣・鶴見祐輔、大日本医師会理事・堂森芳夫、画家・中川一政（欠席）、大日本水産会会長・平塚常次郎、元司法大臣・星島二郎、国際貿易促進協会会長・村田省蔵、音楽家・山田耕筰、朝日新聞社取締役・加藤祇文、毎日新聞社編集（局）長・渡瀬亮輔、読売新聞社取締役・岡野敏成、毎日新聞社編集（局）次長・橘善守<sup>(17)</sup>。

中島は人選についての相談を受けていなかったが、以上の多くの人物と面識があった。中島自身は中国通でも中国語学者でもなかったが、たとえ中国についてほとんど全く無知な日本人であっても、新しい中国について認識を改めなければ、大変な事態を招きうる、と強く感じていた。一方で、それを口に出すのはまだ早いと自制しなければならない事情が、内部にも外部にも存在していると認識し、中島自身も認識の浅い日本人の一人として、ゆっくりと自己改造を行い、みなといっしょに歩いていかなければ、必ず破綻をきたす<sup>(18)</sup>、という信念を抱いていた。

硬直した日中関係を打開するためには、改革が急務であった。そのため、日本政府と正面をきって相対する人物、中島の言葉を借りれば、「前衛」が必要となる。「前衛」は常に少数である。それを大きな勢力にするためには「後衛」が必要であるというかねてからの中島自身の考えと合致するからこそ、「後衛」を自認する彼は、憲法擁護国民連合代表団の一員であった千田是也の推薦を受け、日中文化交流協会の初代理事長を引き受ける意

---

(17) 「日中文化交流協会——理事長役を引き受ける」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 88-89。

(18) 「多彩な顔ぶれ——財政困難でつづく苦しみ」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 107。

志を固めたのである<sup>(19)</sup>。こうして、中島は53歳のとき、東京大学仏文科で非常勤講師として教鞭を執りながら、日本中国文化交流協会の初代理事長となり、「後衛」としてなすべきことをしようと決意した。

1956年3月23日、日本中国文化交流協会の創立総会が丸の内の工業クラブで開かれた。事務局が起草した趣意書は、次のようなものであった。

#### 趣意書

日本と中国は最近数十年を除いては過去2000年の歴史に於て互いに隣邦として共に平和に生活したばかりでなく、その文化の他のいずれの国より共通し互いにその向上と友好に役立って来たのに鑑み当面まず国交回復前であっても、せめて両国間の文化の交流だけでも促進しなければならないと考える。

われらは昨秋日本各党国会議員団中国訪問団と中国全国人民大会常務委員会との共同コミュニケに示された「両国の文化交流は中日両国の平和と友好を促進する上に役立つものであり、今後いっそう増進させるために両国は努力すべきである」との声明を支持し、その具体的実現に努力するため日中両国の文化交流を斡旋し、文化活動を行うため中国人民対外文化協会との連絡機関として超党派、超イデオロギーで日本中国文化交流協会の創立を企図したものである。

昭和31年3月23日  
日本中国文化交流協会<sup>(20)</sup>

こうして、1956年3月23日、超党派、超イデオロギーの民間団体である日本中国文化交流協会が設立された。この協会は日本政府の支援を経済的サポートを含めて一切受けていない。幸いにして、中国を敵視する政権下にあっても、日中関係の打開を望む人間の数は少なくなかった<sup>(21)</sup>。中島

---

(19) 「日中文化交流協会——理事長役を引き受ける」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 90-91。

(20) 同上、pp. 92-93。

(21) 同上、p. 84。

は硬直した日中関係を打開することを戦時中のシンガポール体験の延長として目標に設定し、喜んで日中文化交流の呼びかけに応じ、なしうる範囲のことをやろうとしていた。1956年の日中文化交流協会設立後はみなを後押しする役割が求められた。

1956年10月25日の時点で、日本中国文化交流協会の事務局員は5人(男4人、女1人) ならずで、53歳の中島に対して、平均27歳という若さであった。中島は、日曜クラブの事務局に応援を求めたほかは事務局の人選にはいっさい口出しをしなかった。中島は理事長ではあるが、経済的能力が皆無であった。「非常勤無報酬で、少なくとも、最初の年は、手さぐりしながら、はじめての道を歩くほかなかった。」<sup>(22)</sup>、と中島は日本中国文化交流協会が設立された当初の苦労を述べている。

設立当初は仮事務所で開催されていたが、1956年11月7日、設立後7カ月経ってようやく丸の内2丁目の三菱仲12号館6号110号室に事務所をかまえた。関東工業株式会社が借りていた部屋で、やがて中国貿易関係の別の会社の名義になったが、その会社の「文化部」という形での仮ずまいであった。1963年夏にこのビルが改築された際、千代田ビルディング602区Aという部屋に一時的に移り、1966年6月6日に有楽町ビルディング4階の一室に移って、協会の名義で正式契約を交すまでは、ドアのガラスに、「日本中国文化交流協会」という金文字を入れることもできない日かげの事務所であった。冷房などはもちろんなく、半地下室のような古ぼけた狭い部屋で、食事時には、調理のにおいが窓から侵入して立ちこめるというありさまであった<sup>(23)</sup>。

日本中国文化交流協会が設立された年、中島の経済状況は厳しかった。彼は当時の生活状況をこのように振り返っている。「東大の非常勤講師などは無給に近く、はっきりいって、日中関係の仕事は、完全な持ち出しであるから、この調子で時間を費やさなければならないとすれば、暮らし方を変える必要がありそうだった。しかし、それは不可能なのである。実生活の整理だけでなく、もっと根本的な生き方の問題も混乱しはじめた。わ

---

(22) 「多彩な顔ぶれ——財政困難でつづく苦しみ」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 110-111。

(23) 同上。

たくしは青年時代に戻ったようなあせりを感じはじめた。このころ、わたくしは、岩波新書の『昭和時代』の執筆をはじめていたので、寸暇を惜しむという自分の生活を反省して、これでいいのかと疑いながら、無我夢中で1956年をすごしてしまった。」<sup>(24)</sup>多忙な日々を過ごす中、中島は心身に疲労を覚え始めた。中島は1956年の自分を「岸辺の木の幹をしっかりとつかみながら、片手で水をかきわける形」<sup>(25)</sup>、と喩えている。にもかかわらず、中島は日本中国文化交流協会の仕事を放棄しなかった。

1958年のある日、日本中国文化交流協会事務局員が中島のところに待遇について交渉をしに来た。当時、日本中国文化交流協会は会費と寄付金で運営されていて、中島は無給であったため、事務局員が待遇を問題にしたのには驚いた<sup>(26)</sup>。当時の生活について、中島は次のように回顧している。「1958年から59年にかけてのわたくしは、何度もくりかえすが、自分の生活の整頓の必要を感じながら、どうすることもできない状態であった。時間のきまっている仕事は、毎週水曜午後の東大の講義、金曜夕の『週刊朝日』の書評「週刊図書館」の会議ぐらいなものだが、実際問題として、フリーランスの文筆業者、ジャーナリストの生活は、意外に忙しいものである。日中関係を含めて、名目だけでない関係文化団体その他が少なくとも十数種あり、放送関係の仕事も多かった。すでにそのころから、わたくしの執筆時間は夜半から夜明けにいたり、午前中睡眠という異常な生活形態が固定していた。」<sup>(27)</sup>

以上、日本中国文化交流協会の設立前後の状況を通して、中島健蔵が日本中国文化交流協会の理事長を引き受けた当時の経緯について整理した。日本中国文化交流協会理事長というポストは決して想像するほど楽で優雅な仕事ではない。中国を敵視していた日本政府からの圧力があつた上に、中島は日本中国文化交流協会を支えるため、体力的にも負担が大きく、経済的にも困窮していた。しかし、中島は諦めなかった。彼は「後衛」にま

---

(24) 同上、p. 103。

(25) 同上、p. 112。

(26) 「長崎国旗事件——日中関係は最悪の事態」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 165。

(27) 「『迷路』脱出——陳毅副総理の思い出」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 188-189。

わり、日中両国の国民は友好関係を結ぶべき、これこそ時代が進む正しい方向であると確信していたのである。

続いて、中島健蔵の中国訪問ならびに日中関係についての執筆状況を整理し、謝冰心や巴金などの中国の知識人との交流を手がかりに、中島が日中友好事業に対していかに貢献したかを探ってみたい。

## II 中島健蔵の中国訪問および日中関係についての執筆状況

1956年3月23日、日本中国文化交流協会が創立され、53歳の中島健蔵は躊躇うことなく毅然たる態度で初代理事長になった。その後の23年間、中島は15回にわたって、中国を訪問した。その間、毛沢東主席、周恩来首相とも度々会見し、日本に帰国後多くの新聞や雑誌に中国訪問を通して見聞したことを書いた。下表は中島の15回の中国訪問および日中関係についての執筆状況をまとめたものである。

日本中国文化交流協会のほかにも、中島は多くの団体で活動してい

中島健蔵の訪中状況および日中関係等についての執筆

訪中回数	西暦 (中島の年齢)	訪中状況	日中関係等についての執筆
1	1957年 (54歳)	11月6日の夜、羽田から北京へ出発した。日本文学代表团と中国作家協会代表との共同声明の署名に加わった <sup>(1)</sup> 。	11月27日、「北京で感じたこと」『朝日新聞』。28日、「伸びる中国の音楽界」『読売新聞夕刊』。12月8日、「日中文化交流の意義」『週刊朝日』(共同特信)
	1958年 (55歳)	5月13日、「日中両民族の伝統的友好関係の危機に直面し国民の皆さまに訴える」という声明に署名。	1月、「新中国の撮影界現状記」『アサヒカメラ』。2月、「中国で感じたこと」『新日本文学』。8月、「憂うべき日中関係」『新日本文学』。『点描・新しい中国』六興出版社。10月、「現下の日中関係について私はこう思う」『世界』。「日中文化交流をはばむもの」『外交時報』。11月、「日中関係の底にあるもの」『中央公論』
2	1959年 (56歳)	5月、日本中国文化交流協会代表として中国を訪問し、中日友好協会と「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を北京で発表。	1月、「1959年最大の課題・日中関係の進路」『週刊朝日』。5月、「中国敵視政策をどう変えるか」『中央公論』。31日、「世界平和と日本の局勢」『人民日報』。9月、「中国現代文学在日本」『世界文学』

「後衛思想」の先駆者

訪中回数	西暦 (中島の年齢)	訪中状況	日中関係等についての執筆
3	1960年 (57歳)	7月26日、陳毅外交部長、訪中の日本代表団に対し、「両国人民は子々孫々まで友好を続けなければならない、中日友好は世界平和の重要な要素の一つである」、との談話を発表。	10月、「中国訪問雑感」『新日本文学』。木村伊兵衛と共編『文学者の見た現代の中国』（写真集）毎日新聞社。11月、「新しい条件のなかで——日中国交回復への道を 特集〈総選挙—安保闘争の後に〉」『世界』。12月、「日中文化交流の新段階」『人民中国』 * 4月、東京大学仏文科大学院講師になる。
4	1961年 (58歳)	3月、アジア・アフリカ作家会議東京緊急大会に日本代表の一人として参加。	* 10月31日、国立国語研究所評議員を辞任。12月、新日本文学会幹事会議長を辞任。文部省国語審議会委員を辞任。
5	1962年 (59歳)	10月22日、中国人民対外文化協会の楚図南会長と「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を発表。	4月1日、「中国写真展」『朝日ジャーナル』。4月、「蘆溝橋事件から25年」『週刊朝日』（共同特信） * 3月、東京大学講師を辞任。
6	1963年 (60歳)	12月27日、「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」、北京で調印。	8月25日、「原水禁世界大会の教訓」『アカハタ』
7	1964年 (61歳)	中国人民対外文化協会の招きを受けて、中華人民共和国成立15周年の祝典に参加した。10月8日、北京にて中国人民対外文化協会会長楚図南と「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」に署名。	1月、中島健蔵、陽翰笙「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」『アジア経済旬報』
8	1965年 (62歳)	12月8日、中国対外文化協会と日本中国文化交流協会は北京で「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を調印。	9月21日、「オムニバス芸能史・31・梅蘭芳の来日」『毎日新聞夕刊』
9	1966年 (63歳)	5月、北京におけるアジア・アフリカ作家会議（6月27日—7月9日）に出席のため、京子夫人とともに訪中。 7月5日、京西賓館の一室で「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」の原案を起草し、署名。	1月、「日中両国人民間の文化交流にかんする共同声明」『アジア経済旬報』。「中国の青年芸術家たち」『人民中国』。4月、「中国の写真界」『フォトアート』。9月、「内外の危機に際し、再び日中友好の促進を国民に訴える（著名人32氏の訴え）」『アジア経済旬報』。12月12日、「私の1966年」『週刊読書人』。12月、「日中戦争前夜と現在」『群像』。「緊急会議を包む空気」『北京緊急集会記録』AA作家会議日本協議会
	1967年 (64歳)	——(2)	10月、「アジア・アフリカ作家日本委員会結成宣言」『アジア経済旬報』。12月、「日中友好協会（正統）中央本部ならびに日本国際貿易促進協会に対するの官憲の不当弾圧に抗議する」『アジア経済旬報』

訪中回数	西暦 (中島の年齢)	訪中状況	日中関係等についての執筆
	1969年 (66歳)	—	1月、「中国で開催する日本工業展覧界の全品展示のため佐藤内閣に要求する声明」『アジア経済旬報』。 5月、「日中友好協会（正統）本副会長顧問声明」『アジア経済旬報』
10	1970年 (67歳)	21周年国慶節に、日本中国文化交流協会代表団の団長として参列し、日本と中国との間にある政治的距離をはっきり認識した。天安門楼上で、毛沢東主席との会話の中で、「小異を残して大同につく」重要性を理解した。	10月24日、「プロ文革後の中国印象記」『毎日新聞夕刊』。26.27日、「四年ぶりの中国」『読売新聞夕刊』。 12月、「天安門上にて」『中央公論』。「中国の旅・ふところ日記」『文藝春秋』。「日中国交回復は反安保の闘い」『月刊総評』。「中国の旅・ふところ日記」『文藝春秋』 *日本ペンクラブ理事を辞任。
11	1971年 (68歳)	10月、中華人民共和国創建22周年の国慶節に、再び日本中国文化交流協会代表団団長として参列し、北京にとどまっていた。同じく訪問中の社会党国会議員を含む日中友好代表団と共に、周恩来総理と会見した。10月19日に帰国した。	4月、「日本国と中華人民共和国と」『週刊ポスト』。7月、「中国の第一印象」『新評』。「満15歳を迎えた日中文化交流協会」『人民中国』。9月、「中国を見る目」『別冊週刊読売』。 10月、「日中講和への前提をなすもの」『世界』 *2月に発足した日中国交回復国民会議の議長となる。12月、アジア・アフリカ作家会議日本委員会を退会。
12	1972年 (69歳)	8月16日朝、日本訪問公演を完了して、戦後初めての羽田—上海直行便で帰国した上海舞劇団のチャーター機に同乗した <sup>(3)</sup> 。北京に着いて、8月19日の夜、中日友好協会廖承志会長、中国人民対外友好協会楊驥副会長の招待宴会で挨拶した。	1月、「日中国交回復運動をめぐる（アジアの中の『日中問題』）（特集）」『月刊社会党』。「中国外交の原則（中国外交と日本）」『公明』。 2月、「中国の音楽事情」『音楽の友』。3月、「世界の旅・中国」『太陽』。「現代中国演劇を語る——文化大革命以後」『テアトロ』。28日、「中国の酒」『東京新聞夕刊』。4月、「中国音楽の現状」『読売新聞』。5月、「亀井勝一郎と中国」『亀井勝一郎全集・13・月報』講談社。9月20日、「日中国交回復の緊急性」『毎日新聞夕刊』 *9月、日本と中国の国交回復。
	1973年 (70歳)	4月15日—5月18日、廖承志を団長とする中日友好協会代表団、訪日。中島が接待した。 *2月、日本放送協会より1972年度放送文化賞を受賞。日本中国文化交流協会は朝日賞を受賞。	1月、「現代中国の音楽への期待」『周辺』。1月4日—2月12日（連載全20回）、「わたしの中国」『東京新聞夕刊』。2月と3月、「中国美術の現状」（2回）『中美』。4月、「中国の芝居の現状」『季刊・歌舞伎』 *日本中国文化交流協会の会誌『日中文化交流』200号に達す。

訪中回数	西暦 (中島の年齢)	訪中状況	日中関係等についての執筆
13	1974年 (71歳)	9月、日本中国間の空路直行第一便にて訪中。  * 日本文芸家協会理事を辞任、日本ペンクラブを退会。	1月、「高度の日中学术交流」『自然』。7月、「木村伊兵衛の横顔」『紙碑・木村伊兵衛』『木村伊兵衛写真集・中国の旅』朝日新聞社。10月1日、「新しい中国の音楽・中国中央楽団への期待」『読売新聞夕刊』。11月、『後衛の思想——フランス文学者と中国』(朝日選書22)朝日新聞社
14	1975年 (72歳)	—	—
	1976年 (73歳)	—	3月、「周恩来総理とわたくし」『月刊エコノミスト』。「日中国交正常化につくされた周総理の思い出」『月刊社会党』
15	1977年 (74歳)	8月、京子夫人、井上靖らと新疆ウイグル自治区を訪問。	* 5月、日本放送協会中央放送番組審議会委員を辞任。
	1978年 (75歳)	* 3月頃より体調不良を自覚し、8月初め、外出不可能となり、同月下旬から病床生活に入る。 * 6月3日、日本比較文学会総会において名誉会員に推挙さる。	1月、「新疆紀行」『人民中国』。3月、「中国壁画随想」『グラッド世界美術・六・中国の美術・二』講談社。6月15日、「郭沫若さんの逝去を悼む」『東京新聞夕刊』。30日、「郭さんの逝去」『社会新報』。7月18日、「郭沫若を追悼する」『エコノミスト』

出所：筆者が「中島健蔵年譜(含執筆目録)」中島健蔵『回想の戦後文学——敗戦から60年安保まで』(平凡社、1979年、pp. 392-411)、中島健蔵『後衛の思想——フランス文学者と中国』(朝日選書22、朝日新聞社、1974年)に基づいて作成した。

- (1) 最初に実現した訪中日本代表団は、文学であった。1956年9月4日に交渉をはじめ、11月6日に出発した第1回日本文学代表団は、代表3名で団長なし、随員8名という変則的な構成であった。「日中文化交流協会—理事長役を引き受ける」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 107を参照した。
- (2) 詳細な資料が見つからない。以下同。
- (3) 「小異を残して大同につく」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 243。

た<sup>(28)</sup>。中島は日本文芸家協会の一員として、1957年11月10日に公布した

(28) 「中島健蔵年譜(含執筆目録)」中島健蔵『回想の戦後文学——敗戦から60年安保まで』(平凡社、1979年、p. 411)によると、逝去当時の関係団体役職はこの通りである。「日本中国文化交流協会会長、日本著作権協議会議長・代表理事、日本著作家組合書記長、日本オーディオ協会会長、日本郵趣協会会長、工業技術文化センター会長、新興美術院理事長、日本近代文学館理事、東京都交響楽団理事、善隣学生会館理事、音楽鑑賞教育振興会理事、日本放送協会、解説委員会委員、同、番組制作技術改善委員会委員、同、洋楽委員会委員、東京文化会館運営審議会委員、東京都オペラシーズン実行委員会委員、都民劇場音楽サークル企画委員、同、新劇サークル企画委員、同、新劇サークル企画委員、野間春公野間文芸賞選考委員、平凡社「太陽賞」選考委員、国際教育情報センター評議員、中国研究所評議員、遠山音

「共同声明」の中でこのように書いている。「我々日本中国両国の文学者は、第二次日本文学代表団の訪華を機に、相会して歓談し、両国文化の諸問題について意見を交換することを得たことを深く喜ぶ。日本中国両国の文化は、その長い歴史を振り返るまでもなく、互いに密接な関連によって今日の開花を見たものであって、現下の特殊な政治的情勢は、この交流の必要を一層我々に痛感せしめるものである。日本文学代表団訪華の時にあたって、我々両国の文学者は、両国文化の将来のために、文学者および文学作品の交流をより一層活発ならしめることの必要なことに完全な意見の一致を見、それが実現のため、あらゆる努力を惜しまないことを期するものである。」<sup>(29)</sup>

1957年11月6日夜、中島健蔵は羽田空港から北京に飛び、はじめての中国訪問を果たして以来、多くの「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を起草し、署名した。最後に起草し、署名したのは、1966年7月5日に北京の京西賓館の一室であった<sup>(30)</sup>。12回目の中国訪問となる1972年8月19日の夜、中日友好協会廖承志会長、中国人民对外友好協会楊驥副会長が主催した招待宴会で中島は次のように述べた。

日中国交回復は、われわれの長い間の念願でありました。日中国交回復は、両国民の要請を基礎としながらも、両国政府の間のとりきめによって成立するものであります。田中内閣は、日中国交回復について、積極的な姿勢を示し、田中首相は近く中華人民共和国をみずから訪問する意志を表示しました。日中文化交流協会は、思想において政策において、必ずしも田中内閣と全面的に見解が一致するとは、考え

---

楽財団評議員、下中財団評議員、株式会社俳優座劇場監査役、日本演奏連盟相談役、大原綜合病院顧問、日本出版学会顧問、日本出版販売株式会社図書館顧問、瑞雲書道会顧問、日本比較文学会名誉会員。」

(29) 中島健蔵『点描・新しい中国——北京、天津、広州』六興出版部、1958年8月。底本は志賀直哉、佐藤春夫、川端康夫監修『世界紀行文学全集』第11巻 中国編Ⅱ、修道社、1960年、p. 273。1957年11月10日に発表した「共同声明」に、「日本文芸家協会」は「山本健吉 井上靖 多田裕計 十返肇 中野重治 堀田善衛 本多秋五 中島健蔵」、中国作家協会は「周揚 邵荃麟 劉白羽 臧克家 吳組緇 陳白塵 嚴文井 蕭三」が署名した。

(30) 「文化交流の奮闘期——緊迫した内外の情勢」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 225-226を参照した。

ておりません。しかし、一刻も早く日中両国の国交回復を実現すべきであると信じ、田中内閣の積極的姿勢を強く支持し、現内閣による国交回復の実現を期待し、支援の努力をおしまない決意であります。

ここ数年来、ことに1970年あたりには、全世界に第三次世界大戦の可能性が見えておりました。新しい世界大戦が起こった時、完全中立を維持できる国は、ほとんどないでありましょう。ことに日本と中国との間に国交が絶えている状態は、中国にとって危険であると同時に、日本にとって破滅の危機を含んでいると考えます。この危機を克服するための最良の方法の一つは、日中両国の国交回復であり、これは急を要する緊急な問題であるというのがわれわれの見解であります<sup>(31)</sup>。

日中の国交が正常化される前、中島は雑誌『世界』（1971年10月号）で「日中講和への前提をなすもの」という文章を発表し、このように呼びかけている。「あらゆる意味でもっとも関係の深いはずの日本と中国との国交が、26年もの間、不自然な形で中断のまま放置されて来たことに対して、われわれは、改めて反省を重ねなければならない。（中略）ここでいう反省とは、いたずらに頭を下げることではない。新しい国交を開き、明るい未来を築くために、われわれがみずからおこなうべき反省である。そして、これは、むしろ未来に向かって胸を張って歩き出すために、どうしても必要な反省なのである。」中島はここで反省の真の意味を的確に指摘している。反省とはただ単に頭を下げるのではなく、よりよい未来に向かうために行う行動なのである。

中島健蔵などの日本の知識人の長年の努力がようやく報われて、1972年9月29日午前10時20分（日本時間11時20分）、北京市の人民大会堂で、日本国側の田中角栄総理大臣、太平正芳外務大臣と、中華人民共和国側の周恩来国務院総理、姫鵬飛外交部長が、両国政府の「共同声明」に署名した。この日中文化交流史に残る歴史的な瞬間を中島は東京中野の自宅のテレビで見ていた<sup>(32)</sup>。中島は「後衛思想」の先駆者として、23年もの歳月を

(31) 「小異を残して大同につく」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、pp. 244-245。

(32) 「日中国交正常化——かわる友好運動の意味」『後衛の思想——フランス文学者と中国』前掲、p. 248。

かけて、日本政府を日中国交正常化に導く道を開いたのである。

1955年11月15日に開かれた周恩来国務院総理と日本憲法擁護国民連合中国訪問代表团との会談以来、中国政府と中島が理事長を務めた日本中国文化交流協会をはじめとする様々な日本の民間団体と積極的に交流した結果、日中国交回復が実現した。

中島は「文化交流」についてこのように述べている。「文化交流は、大きく分けると、文化各界の人物交流、舞台芸術の公演、スポーツの友好試合、文物・美術の展覧会、映画の公開、書物など資料の交流などになる。この順序は、直接に人間が往来するの必要の程度による。何よりも大切なのは、責任をもつ人間の気もちが通じることである。」<sup>(33)</sup>

日中国交回復後、1973年4-5月の中日友好協会訪日代表团は団員が総勢54人という大規模なものであったが、この規模になると、受け入れ側として文化交流が含まれていると考えなければならない、と中島は考えていた。この代表团には、十年以上前からの旧知である廖承志、経普椿（廖承志の妻）、楚図南、孫平化、王芸生、謝冰心、林麗韞、李季、張瑞芳、呉学文などが加わっていたため、中島は日中文化交流協会設立当時のことが思い出されて、感無量であったという<sup>(34)</sup>。

中島健蔵は長年の日中間の友好、文化交流事業に尽力し、両国の国交正常化に貢献し、中国各界から深い信頼を得た。

次は、中島健蔵と謝冰心、巴金の交流関係を謝冰心と巴金が発表した中島健蔵についての作品を通して検討したい。

### III 中島健蔵と謝冰心、巴金との交流

#### 1. 中島健蔵と謝冰心との交流

中国で「文学の祖母」と称される謝冰心は「遥祝中島健蔵先生六十大慶」（「遠方より中島健蔵先生の還暦を祝う」）<sup>(35)</sup>、「訪日観感」（「訪日感想」）<sup>(36)</sup>、

(33) 同上、p. 252。

(34) 同上。

(35) 冰心「遥祝中島健蔵先生六十大慶」、初出は『光明日報』1963年2月27日。底本は卓如著『冰心全集』第6巻、海峡文芸出版社、1994年、pp. 197-199。

(36) 冰心「訪日観感」（1964年作）。底本は『冰心全集』第6巻、前掲、pp. 320-322。

「火樹銀花里的回憶」（「花火の中の記憶」）<sup>(37)</sup>という3篇の文章の中で中島健蔵について触れている。本節は謝冰心のこれらの作品を通して、中島健蔵と謝冰心の交友関係を論じたい。

謝冰心は中島の還暦（2月22日）を祝うため、1963年2月23日、北京で「遥祝中島健蔵先生六十大慶」（「遠方より中島健蔵先生の還暦を祝う」）という文章を書いた。謝冰心はこのように思い出を語った。「私たち（訪日代表団：引用者注）が日本に行くたび<sup>(38)</sup>、羽田空港の人ごみの中に白髪でたくましい彼（中島健蔵：引用者注）を見つけると、私たちはまるで家に戻り、本当の兄に会ったような喜びや安らぎを感じた。日本では、私たちは彼と共に会議に出たり、旅行したりして至れり尽くせりの接待を受けた。旅行中、彼の話の聞いたり、カメラで私たちを集めてあちらこちらで写真を撮ってくれたりするのを見て、彼の眼尻や口元に活発でかつユーモアに溢れる微笑みを見ると、私たちは彼の身体に青春の生き生きとした息吹が溢れていると感心した。」

前述したように、その頃、中島の仕事環境は決して平坦ではなかった。彼は当時の日本の現状に決して満足していなかったが、将来日本が必ず繁栄すると信じていた。1956年3月23日に日本中国文化交流協会が設立されて以来、中島は東京と北京を行き来していたが、謝冰心一行に空港で迎えられるたびに、彼は心いっぱい喜びで旅の疲れを忘れるほどだった。謝冰心は中島健蔵に対して、「懸命に仕事および闘争の中で、永遠の若さを保っている。」というイメージを持っていた。

1963年11月5日から12月3日まで、巴金は中国作家代表団の団長として、謝冰心は副団長として訪日した。小論冒頭で言及した写真はその時に撮ったものと考えられる。謝冰心は「訪日観感」（「訪日感想」）で、日本で知り合った日本人について回想している<sup>(39)</sup>。その中で、中島の自宅に招

---

(37) 冰心「火樹銀花里的回憶」（1984年2月1日作）、初出は『人民日報』1984年5月2日。底本は『冰心全集』第7巻、前掲、pp. 446-448。

(38) 謝冰心は8回来日し、また日本に5年間（1946-1951年）居住し、日本との間に深い感情的な関係を築いた。謝冰心の日本における具体的な行動については拙著『冰心研究——女性・死・結婚』汲古書院、2010年第2章に詳しい。筆者は謝冰心は第5回目（1961年3月24日-4月22日）、第6回目（1963年11月5日-12月3日）、第7回目（1973年4月16日-5月18日）の来日に中島健蔵夫妻に会ったと考える。

(39) 冰心は「訪日観感」（『冰心全集』第6巻、前掲、pp. 320-322）で中島健蔵、井上靖、末川博、

かれたときのことをこのように描写した。「中島健蔵先生のリビングルームの中には、壁に溢れた中国の書画のほか、ガラス製の棚が一つ置いてあり、その中には彼がお気に入りの中国の珍獣で溢れている。パンダの形の陶器や布製の玩具、それにパンダの切手やパンダメーカーのタバコの箱が置いてある。これらのものは私の心を家の近くにある北京動物園まで連れていってくれた。」

中島健蔵の自宅のリビングルームは中国のもので溢れかえっていた。中国の書画やパンダの形をした陶器、玩具などを見て、中島もきつと謝冰心と同じような気持ちになり、中国に思いを馳せたことであろう。中島は中国に関係するものを自宅に置くことによって、中国を思い、中国人の友人を思い、日中の国交回復が一日でも早く実現できるようにとひたすら願い、23年間にわたって奮闘し続けたのである。

1979年6月11日、謝冰心が心の兄と慕っていた中島は、肺癌のため亡くなった<sup>(40)</sup>。しかし、その後も京子夫人は中島健蔵と同様に日中友好事業に従事していた作家井上靖<sup>(41)</sup>と共に訪中し、謝冰心や巴金との交流を続けた。1981年、井上靖夫妻と京子夫人は家で療養中の謝冰心を見舞いに行った。謝冰心の家のリビングルームは狭かったが、日中の知識人は通訳者を介して心の交流を行った。謝冰心は後に「この場面はいつまでも永遠に記憶に残っている」<sup>(42)</sup>、と述懐している。

謝冰心は東京にある中島の自宅を訪問するたび、壁に溢れかえっている蔵書に囲まれて、供された茶菓や酒肴の香りに包まれながら、中島夫妻と歓談した。1980年、謝冰心が病に臥すと、京子夫人は訪中するたび、必

---

伊田義雄、白石凡、川端康成、丹羽文雄、石川達三、松本清張、広津和郎、大原富枝、壺井栄、佐多稲子、由起繁子、芝木孝子という日本人の友人について触れた。

(40) 中島健蔵は1979年5月、日本中国文化交流協会理事会において同協会会長に推挙さる。6月11日午後11時50分永眠（肺癌による全身衰弱）。6月13日、自宅にて密葬。7月3日、青山葬儀所にて日本中国文化交流協会葬（葬儀委員長・井上靖）。9月18日、世田谷豪徳寺の中島家墓地に埋葬。

(41) 筆者は「真の『文化交流』とは何か——井上靖と謝冰心を中心に」（『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第43号、2012年8月、pp. 167-202）で井上靖と謝冰心の文化交流について論じたことがある。井上靖は生涯を通して、中国へ27回訪問した。

(42) 冰心『『井上靖西域小説選』序』（1982年9月24日作）、初出は『文芸報』1984年第11期。井上靖『井上靖西域小説選』新疆人民出版社、1984年6月初版。底本は『冰心全集』第7巻、前掲、p. 316。

ず病院や自宅へ見舞いに行った。<sup>(43)</sup>謝冰心と中島健蔵夫妻はこれらの交流を通して、まるで実の兄妹のようになった。この関係は互いに日中友好の信念を抱いているからこそ生まれたのであろう。隣り合う国同士、日本と中国の国民は親善と友好を結び、助け合い、協力すべきである。謝冰心と中島夫妻との交流は通訳を通さなければならなかったが、彼らは同じ目標を抱いていたからこそ、国境を越えた友情を育み、心と心が繋がっていた。同じ夢、同じ信念を持つことは、日中両国民が永遠に友好関係を結ぶのに不可欠な条件である。

謝冰心のほかに、巴金も中島健蔵の旧友である。次は、中島が逝去した後、巴金が『隨想録』で書いた「中島健蔵先生」という中島を追悼する作品を通して、中島と巴金の国境を超えた交流を分析したい。

## 2. 中島健蔵と巴金の交流——巴金の「中島健蔵先生」<sup>(44)</sup>を通して

1966年5月、中島は北京で開催されるアジア・アフリカ作家会議に出席するため、京子夫人とともに訪中した。当時、中国では文化大革命がすでに始まっており、謝冰心や巴金などの知識人はみな迫害に遭っていた。

1966年6月、中島夫妻は北京のアジア・アフリカ作家緊急会議に参加した。その日、空港へ迎えに行く人が多く、巴金もその中の一人であった。中島夫妻は巴金に会えたことを大変喜んでいて、旅館へ着いたとき、京子夫人は「巴金に会えてとても安心した」と言った。「とても安心した」という言葉から、巴金本人に会うまで、中島夫妻は巴金の身の上のことを「相当心配していた」、ということが推察される。巴金はこの「安心した」という言葉の意味するところを理解していたが、その後の数回の談話を通して、中島夫妻が巴金の身の安全を親身になって心配していたことを知るにつけてますます感激した。当時、『人民日報』が「あらゆる社会の悪人を打倒せよ」という社説を發表したため、郭沫若の著書がすべて焼かれたなど、さまざまなデマが日本では飛び交っていた。中島夫妻は巴金もきっと迫害されたに違いないと考えて心配していたが、思いもよらぬ形で巴金が

---

(43) 「火樹銀花里的回憶」『冰心全集』第7巻、前掲、pp. 447-448を参照した。

(44) 巴金「中島健蔵先生」、初出は『大公報・大公園』（香港）1979年8月16、17日。底本は巴金「中島健蔵先生」『隨想録』『巴金全集』第16巻、人民文学出版社、1991年、pp. 114-119。

公の場に出て活動しているのを見て安堵し、「安心した」としみじみと語ったのである。このことは巴金の心に極めて鮮明に焼き付いていた。中島夫妻の喜びは誠心誠意から出たものであり、巴金の感謝もまた心から湧き出したものであった<sup>(45)</sup>。

その後、巴金は中島夫妻とともに北京から武漢に移動し、武昌空港で別れた。巴金は別れた際に中島夫妻の乗る民航の小型機にずっと手を振り続けた。これが最後の別れになるかもしれないという思いに駆られ、目には涙が溢れて前が見えなくなってしまった。その後、尽きることがない取り調べの年月の中、「五・七幹部学校」（〈文革時の〉幹部の強制労働収容所：引用者注）で野菜を栽培しながらダンテの『神曲』第1巻を暗唱することで、徐々に心の平穏が得られ、さまざまなことを考えた。巴金はよく東京の友人を思い浮かべていた。新聞で中島の写真や彼が中国に着いた消息を見て、日本の友人との再会を待ち続けていた。

1966年7月、巴金は武昌空港で中島夫妻と別れたあと、一日が一年のように長く感じる辛い「牛小屋」で生活する中で、中島と一緒によく酒を飲み、親しく語り合った日々を思い出していた。巴金は中島と再会できることを信じて、ひたすら待ち続け、11年後の1977年ようやく上海空港で中島健蔵を再び迎えることができた。巴金は当時の状況を以下のように回想している。「二人とも熱い涙を流し、お互いの手を強く握りしめて、言葉に詰まり、『こんにちは。』以外は何も言えなかった。」<sup>(46)</sup>1966年8月、巴金は上海市文聯の造反派に批判されて、孤立・反省させられ、上海文聯の「牛小屋」に閉じ込められて労働を強制され、9月10日には自宅が差し押さえられて、簫珊夫人も迫害されるようになった。1977年4月20日前後、巴金はようやく名誉回復されたが、その後、知り合いから感動的な話を耳にした。知り合いですらたとえ道で遇っても見て見ぬふりをするような状況にもかかわらず、多くの日本人の友人が巴金の消息を尋ね、彼への面会を求めたというのである。

中島健蔵が巴金と最初に会ったのは、巴金が初めて日本を訪問した1961年であった。巴金は「中島健蔵先生」の中で、中島との交流をこの

---

(45) 「中島健蔵先生」『随想録』『巴金全集』第16巻、p. 115。

(46) 同上、pp. 114-115。

ように述べた。「私たちは行ったり来たりして、ほとんど毎年会って、腹を割って話せるようになった。その状況は1966年7月まで続いた。彼はお酒が好きで、しかも酒豪である。私は彼に数回ご馳走したことがあるが、よく彼にお酒をほどほどにすること、と忠告した。私は自分の勧告がそれほど役に立たないとわかっていたが、彼がお酒で悩みを解消しようとしていることを知っていた。当時、彼は日中両国人民の友好事業に奮闘していた。彼は脅迫の手紙をもらったことがあり、軽蔑されたこともある。自身が書いた作品を発表するところが見つからなかったり、出版社も中島の作品の出版を断ったりする。生活源が断たれたため、車を売って、苦難の中で生活をしていた。しかし、彼は屈服せず、動揺もしなかった。」<sup>(47)</sup>

中島が受けた以上のような被害は自身の作品に具体的に記録されてはいない。巴金は中島が心を開いて話せる心友であったため、中島は日本中国文化交流協会で理事長として勤めていた頃に受けた苦悩を隠さずに巴金に話した。巴金も1977年に中島に会ったとき、自身が文化大革命の中で被った苦しみを隠さずに言おうとしたが、心の奥底にのりのようにたまっているものを言葉にすることはできなかった<sup>(48)</sup>。1986年、巴金は『随想録』で、中国で国家規模の「文革博物館」を建てようと提案したが、実現することはできなかった<sup>(49)</sup>。

巴金は「もし中島の長年にわたる努力がなかったら、日中両国の文化交流は今日のような発展があったであろうか。」<sup>(50)</sup>と述べている。中島が肺癌で入院し、危篤に陥ったときに数名の人を呼んだ。巴金はそのうちの一人である。1984年5月9日、巴金は中国作家協会的主席、中国ペンクラブの会長として東京で行われる国際ペンクラブ第47回大会に参加した。東京に着いて日程を話し合ったとき、巴金は二つの希望を出した。一つは日本中国文化交流協会の事務局を見学すること、もう一つは旧友である中島健蔵の墓所に行くことであった。巴金のこの二つの希望からも、彼が中島に対する敬意と故人をしのぶ気持ちが十分に伝わる。

---

(47) 同上、pp. 117-118。

(48) 同上、p. 115。

(49) 2005年元旦、中国で初めて民間の文革博物館が汕頭市澄海区蓮上鎮塔山の観光地に建てられた。

(50) 「中島健蔵先生」『随想録』『巴金全集』第16巻、前掲、p. 118。

以上のように、中島健蔵と巴金は互いに誠心誠意で相手を思い、腹を割って話すことのできる心友になった。中島健蔵と謝冰心、巴金などの日中の知識人の友情は日中の国交が回復する前から命が尽きるまで続いていた。彼らの友情は日中友好交流史において極めて重大な役割を果たしたであろう。

## おわりに

中島健蔵は日中文化交流のために精力的に活動し、中国の知識人である謝冰心と巴金との間に親密な友情を結び、日中両国の友好推進において、極めて大きな貢献をした。郭沫若は中島健蔵の名前の四文字を先頭に、「中流砥柱 島国精英 健康日進 蔵識深閔」（中流の砥柱 島国のエリート 日々健康 博学で見識が高い）という詩を作り、中島を高く評価している。

京子夫人は中島をこのように評価している。「中島は意外に用心深く、周囲の状況とか先の見通しを頭においてのことでした。結局は頼りになる人だったようです。私の一番感心していることは、どんなに酔った時でも、決して人の致命的な欠点にふれることがなかった点です。（中略）中国の方に『中島先生は楽観主義ですね』と言われたことがありましたが、神経質でありながら、ものにこだわらず、八方破れの彼の性格は決して生来のものではなく、経験と努力の結果得たものだと思います。」中島は自分の信念をしっかりと持っていた。彼は後半生をかけて、日中友好という信念を持って耐えず努力し奮闘していた。中島は日中国交回復がまだ実現されていない頃から日本中国文化交流協会の理事長という重職を担い、無給で時には右翼から脅迫されても、困難に向かって長年「後衛」にまわり、日中友好事業に身を献げた。

小論第2章の表でまとめたように、中島は日中関係について多くの執筆活動を行っている。多くの社会活動に参加していた中島は目まぐるしい生活を送り、寝る間を惜しんで、日中国交回復に取り組む活動をはじめとしてさまざまな活動に参加していた。京子夫人の回想によると、中島はたとえ紙一枚でも資料として大切にとっておく習慣があり、山積みの資料やいっぱいにつまった本棚のせいで、自宅の壁の見える部屋でゆっくり食事

をしたことがなかったという<sup>(51)</sup>。中島は極めて勤勉で、何事に対しても最後までやり抜く強い意志を持っていた。彼のこのような性格が、23年間にも及ぶ日中国交回復を目指す活動を可能にしたのである。

京子夫人いわく、「中島は元來、ひとりっ子であったことや家庭の事情もあって、孤独癖があり気が弱く淋しがりやの純粋な人で、その半面、何事にも好奇心が旺盛でした。私も最初は、広く浅いのかなと思っておりましたが、とても几帳面で、切手、地図、本の整理は見事なものでした。中島は常に、遠い理想ではなく、実現可能なことに闘志を燃やしていたようです。仕事には非常に厳しく正確で、小さなことでも徹底的に調べないと気がすまず、資料さがしのために、一枚の原稿を書くのに幾日もかかることもありました。彼は書くことに最後まで現役であることを望み、ポケることを極度に恐れておりました。仕事の上では男女の区別なく、女性の編集者の方に大声でどなることもありました。」<sup>(52)</sup>中島は生命の最後の一刻まで書き続けていた。彼は並々ならぬ努力をし、日中関係の発展において先見の明を持っていたため、戦後のいかんともしがたい日中関係を「文化交流」という糸口に絞り、自ら「後衛」にまわり、日本中国文化交流協会の理事長になり、国内の反中勢力と戦い、自らの命を削って日中友好事業に懸命に奮闘した。

1958年、中島健蔵は『点描・新しい中国——北京、天津、広州』という中国訪問紀行文で日中文化交流の目的について、このようにまとめている。「日中文化交流は、一つの特別な目的をもっていた。日本がわでもよく承知していたことであるが、まず第一に、これは、隣りあわせの日本と中国との人々の学びあいによって、相互理解を深める、という目的のためにおこなわれていたのである。そして、その目的のさらに奥のところには、どんな形にしても、近い将来における真の友好関係への道を開き、平等な条件による平和共存を確実にする、という目的が存在した。これは、法律解釈や、損得の問題に先立つ条件であった。」<sup>(53)</sup>相互理解とは、相手の身

---

(51) 中島京子「あとがきにかえて 夫健蔵のこと」『回想の戦後文学——敗戦から60年安保まで』前掲、p. 390。

(52) 同上、p. 389。

(53) 『世界紀行文学全集』前掲、p. 287。

にもなって考えることができるということである。この信念はいつまでも変わることがなかった<sup>(54)</sup>。

中島は生まれつきの楽観主義者ではない。彼は自身のシンガポール体験によって、日中文化交流の大切さを認識し、日本中国文化交流協会の重職を担い、後半生を通して、自らの日中友好の信念を貫き、並々ならぬ努力をした。中島は1956年に日本中国文化交流協会の理事長に就任して以来、飽くことなく15回訪中し、中日友好協会と共に日中関係の最新動向を確認し、日中国民の願望を確かめて、「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を幾度も起草し署名した。中島のような日本の知識人による民間の活動が日本政府の政策を大きく転換させたのである。

今年(2017年)は日中国交正常化45周年を迎え、来年(2018年)には日中平和友好条約締結40周年を迎える。日中友好はただ単に日中両国だけに留まる問題ではなく、周辺国ひいては世界各国に関係するであろう。日中両国は引き続き「戦略的互惠関係」の理念に立って、共に努力し、政治、経済、文化の面で交流すると同時に、環境、医療関係のような新しい分野での交流と協力をも促進する必要がある。我々は中島健蔵、謝冰心、巴金のような先輩知識人たちの献身的な精神を継承し、謙虚に且つ勤勉に、日中両国における安定した友好関係の発展に努力すべきであろう。

---

(54) 中島健蔵は「長崎国旗事件——日中関係是最悪の事態」『後衛の思想——フランス文学者と中国』(前掲、p. 158)でも、「日中文化交流」は、「まず第一に、これは、隣あわせの日本と中国との人びとの学びあいによって、相互理解を深める、という目的のためにおこなわれていたのである。そして、その目的のさらに奥のところには、どんな形にしても、近い将来における真の友好関係への道を開き、平等な条件による平和共存を確実にする、という目的が存在した。」と強調した。

中文摘要

## “后卫思想”的先驱者

——对谢冰心、巴金的知心朋友中岛健藏的考察

虞 萍

众所周知，中岛健藏是日本的一位研究法国文学的学者，也是1956年3月23日成立的日本中国文化交流协会的第一任理事长。这位研究法国文学的学者为何会与中国有关系？又是怎么成为日本中国文化交流协会第一任理事长的？中岛健藏夫妇为何会在中国和日本尚未恢复邦交时就与谢冰心、巴金等中国老一辈知识分子进行交流，并建立起亲密的友谊的呢？为了解开这一连串的谜团，小论对中岛健藏在日本中国文化交流事业上的奋斗历程做了一个系统的梳理。具体从中岛健藏的新加坡经历着手，探讨了他答应担当日本中国文化交流第一任理事长的来龙去脉。进一步整理和分析了中岛健藏的访华以及他撰写的有关中日关系等方面的各类文章。最后通过谢冰心和巴金发表的有关中岛健藏的作品，对战后中日邦交尚未恢复时中日两国知识分子的交流状况进行了诠释，从而探讨了中岛健藏与谢冰心、巴金之间的交流在中日文化交流史上所产生的意义。